

格助詞「から」の分析

呉, 侃

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

1982-11-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012735>

格助詞「から」の分析

呉 侃

目 次

- 一、（前書き）
- 二、
 - I 従来の「から」についての説
 - II 従来の説に見る問題点
 - III 問題点の考察
 - (一) 格助詞の範囲の設定
 - (二) 格助詞の重なりの問題
 - (三) 「動+て」の扱い
 - (四) 「から」の連体用法について
 - IV 「から」を用いた実例
- 三、
 - I 格助詞「から」の意味、用法
 - II 格助詞「から」と、それと関連のある他の格助詞との異同
 - III これからの課題

一

日本語は膠着語である。助詞、助動詞がくっつくことによって、文が構成され、それがはっきりした論理関係を持ったものとして伝達の役割をはたす。したがって、助詞・助動詞の文中における役割は、絶大かつ不可欠なもので、これはまた、これまでしばしば指摘されてきた通りである。しかし、一方では、今までの助詞についての研究は、必ずしも納得の行くような結論には達しておらず、定説のないものが数多く存しているのが現状である。特に、文の基本的

論理関係をささえる格助詞についての研究は、まだ諸説紛々たるところが多く、そのいずれに従っても、すっきりしないところが残るものである。

したがって、本稿では、その格助詞の中の一つである「から」を取り上げ、格助詞としての「から」の究明を通して、「から」を中心としたいいくつかの格助詞に対しても、なんらかの説明がくだせれば、と願って考察を試みたものである。

以上の目的を以て、本稿では、まず、従来の「から」に関する諸説を検討し、そこに存する問題点をひろい出し、それを一つ一つ解いていくうちに結論に達しようと考えているものである。

つまり、「から」の意味、用法をあらためて分析・分類し、最後にそれと関連のある他の格助詞との異同を見ていくのが本稿の目的である。

従来の説で、問題だと思われるもの、また、各説間に相違があるものについては、できるだけ実例の分析を通して考察を試みたい。

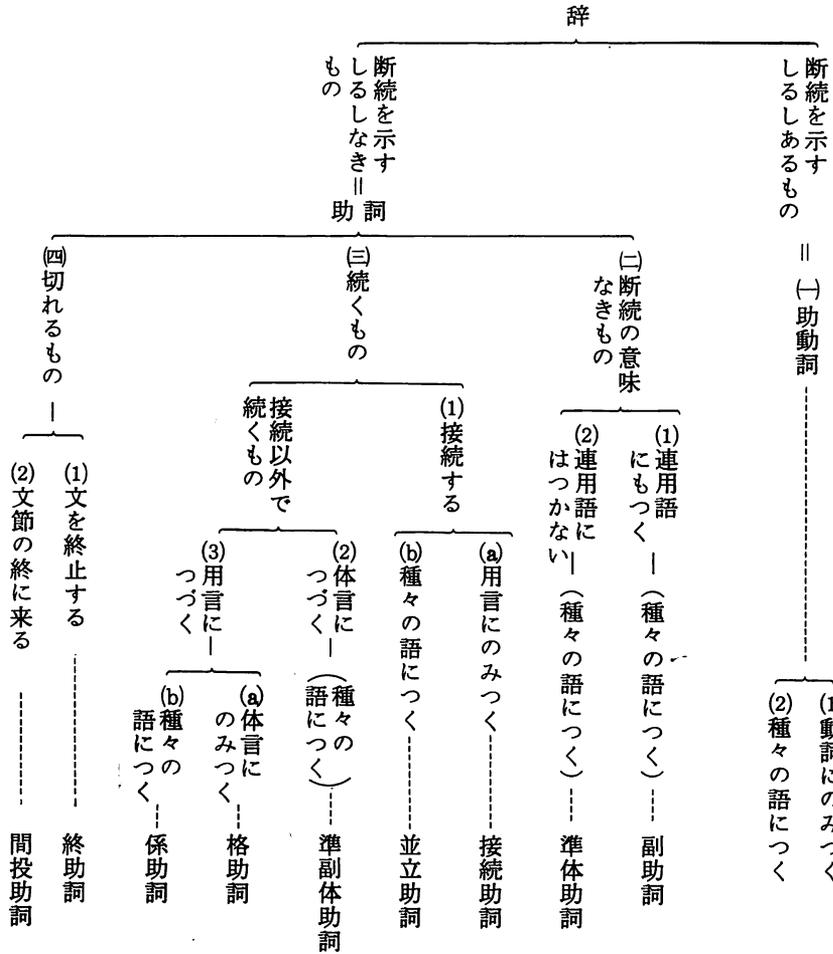
二

I. 従来の「から」についての説

まず、橋本、山田、時枝、湯沢の各氏の説と「新明解国語辞典」の解釈を見てみたい。各国語学者の説の場合、格助詞及び「から」の位置づけもあわせ見る。

(一) 橋本 進吉

(1)



- 副助詞：だけ、まで、ばかり、など、ぐらい、か、やら
- 準体助詞：の、ぞ、から、ほど
- 接続助詞：ば、と、ても、けれども、のに、が、から、ので、し、て
- 並立助詞：と、や、やら、に、か、なり、だの
- 準副体助詞：の
- 格助詞：が、を、に、へ、と、より、から、で
- 係助詞：は、も、こそ、さへ、でも、なりと、

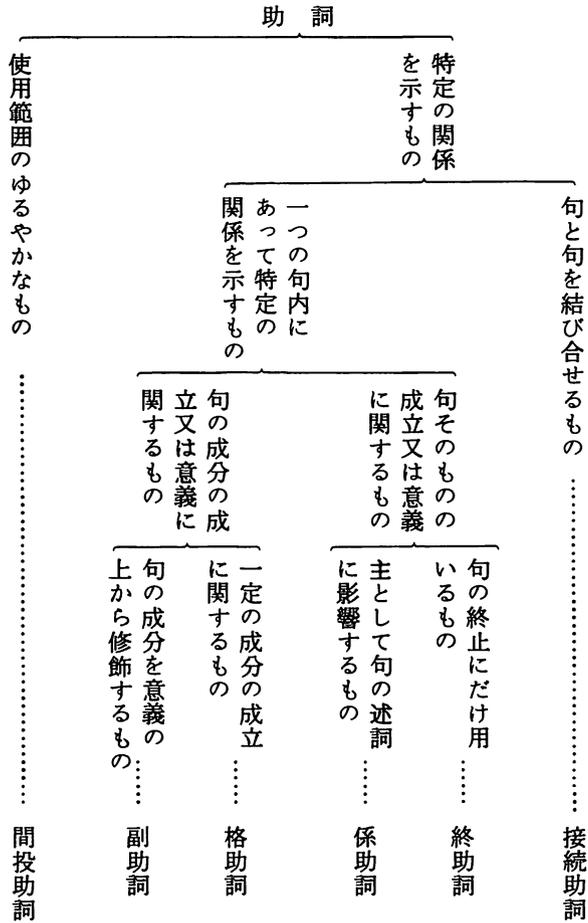
- しか、ほか
- 終助詞：ぜ、ぞ、とも、て、な、や、わ、か、よ
- 間投助詞：ね、な、さ
- (2) 「から」 — 動作の起点を示す助詞で、場所の上にも、時の上にも用いる。これがまた、次のように主語に附いたように見えるものもあるが、主語なる事を示すのではなく、そのものからその動作が出、又は始める事を示すのである。
- 私から一同に申し伝えましょうか。

○それには、先ず君から始めたまえ。

(橋本「国語法研究による」)

(二) 山田 孝雄

(1)



接続助詞：ず、し、と、が(ところが)、に、のに、ものを、から、とも、と、も、けれど(も)、ながら

終助詞：が、え、な、よ、い、ろ、な、とも、ぜ、さ

係助詞：は、も、こそ、さへ、でも、ほか、しか

格助詞：の、が、を、に、と、へ、より、から、で

副助詞：ばかり、まで、など、やら、か、だけ、ぐらゐ

間接助詞：や、ぞ、な、ね、かな

(2) 1. 格助詞と係助詞とは、「格係」の順で連なり、その逆に並ぶことはない。

○東京へも行った。

「からは」「でこそ」「とでも」なども可能である。

2. 副助詞と係助詞とは、「副係」の順で

連なり、その逆に並ぶことはない。

○これだけしかない。

「ばかりでも」「までも」「などは」も可能である。

3. 格助詞と副助詞とは「格副」の順でも、「副格」の順でも連なる。

○君にだけ打ち明けよう。

○君だけに話しておこう。

「へなど」「などへ」なども可能である。

(3) 「から」 — 動作の出自を示す。

(山田「日本文法論」による)

(三) 湯沢 幸吉郎

(1) 助詞を、どういう種類の語に付き、どういう語に関係していくかを明らかにすることから分類すると、つぎの四つになる。

格助詞、接続助詞、副助詞、終助詞
この分類は「中等文法、口語」(昭和22年4月、文部省発行)の採用したものである。

格助詞：が、の、に、へ、を、と、より、から、で

接続助詞：ば、と、ても、も、とも、と、けれど(も)、が、のに、に、から、ので、て、し、ながら、つつ、たり、ものを、ものの、ものなら、ものだから、ものですから、たところが、たところで、たって、て、ては、は、ないで、んで、

副助詞：は、も、こそ、さえ、でも、だって、しか、ほか、なり(と)、なり、まで、ばかり、だけ、きり、ほど、く(く)らい、など、ずつ、どころか、やら、か、や、の、だの、ぞ、がな、して、として、ぐるみ、ごと

終助詞：か、な(禁止)、な(命令)、てよ、ぞ、ぜ、ものか、かしら(ん)、の、だ(ね)、です(ね)、け、がし、え、い、さ、て、とも、な、ね、や、よ、わ

(2) 「から」 — 動作、作用の起るもと(起点)を示すに用いる語であって、つぎのように用いる。

1. 連用修飾語を作る

a) 下から運んだ。昨日から降りつづく雨。誰から聞いたか。富士山へは、吉田口から登った。

b) その品はいくらぐらいから売り出すのだ。

c) 九月に入ってから急に涼しくなった。友達と別れてからふさいでいる。

2. 主語文飾を作る

先生へは私から申し上げます。朗読は、君から始めたまえ。

3. 連体修飾語を作る

それから先は、私も分からない。明治から以前には、そんな事はなかった。あの川から東が隣の村です。

4. 「から」は「まで」と連関的に用いられる。

a) 東京から大阪までは、五百五十キロメートルばかりあります。

b) 出発から到着までの十日間は、新聞も見られなかった。

c) 始めからしまいまで立ち続けた。

d) 甲組は第一番から第十番までだ。

原注：そのほかに、他の語について、体言的性質の連語をつくる。

○これからが大変だ。

○昨日からの雨で水が出た。

○そうなったのも、本人の不注意かららしい。

(湯沢「口語法精説」による。)

(四) 時枝 誠記

(1) 話手の立場を理解する上から、助詞、助動詞の表わす意味を重要なものとして、分類の基準とした。

格を表わす助詞：が、は、の、に、へ、を、
と、から、より、で、まで

限定を表わす助詞：か、は、も、や、さえ、
ばかり、ぐらい、でも、だけ、しか、なり、た
り、こそ、きり、つつ、ほど、だの、やら、な
ど、まで

接続を表わす助詞：が、ば、と、て、ても、
から、けれど、し、ながら、のに、ので、つつ

感動を表わす助詞：か、かしら、よ、な(な
あ)、ね(ねえ)、さ、な、ろ(よ)、ぞ、わ、も
のか、とも、の、や、こと

(2) 「から」—— 格を表わす助詞

○始めから終りまで。

○そんなことから失敗するのだ。

(時枝「日本文法・口語篇」)

(五) 「新明解国語辞典」

① 動作・作用の起点・出発点やそれがもた
らされたそもそもの原点を表わす

○午後一時から会議を行なう。

○忙しさから解放される。

○学校からまだ帰らない。

② 物事の順序、範囲を示す場合の始まりを
表わす

○あなたから、どうぞお先に。

○そのへんにある本を、かたっぱしから読んで
しまう。

○小学校から高校まで、郷里の学校で過した。

○あなたからしてそんなことをしては困る。

○あとから(あとになって)言ったって始ま
らない。

③ 経由点を表わす

○玄関からお入り下さい。

○戸口のすきまから朝日がさしこむ。

④ 原因・理由・根拠を表わす

○かぜから肺炎をひきおこした。

○運転手の不注意から大惨事になる。

○彼の日頃の言動から考えればそれはありう
る事だ。

⑤ 材料・構成要素を表わす

○酒は米からつくる

⑥ 予測・予想される基準量を上回ることを
表わす

○百人から(以上)の人が集まった。

○一千万円から(なんと一千万円以上の)借
金がある。

(「新明解国語辞典」、金田一京助ほか第三
版)

Ⅱ 従来の説に見る問題点

以上見てきた各説では、それぞれ、その助詞
の分類と解釈に、一致したところと相違する
ところがある。それをまとめると、つぎのよ
うになる。

① 格助詞であることでほぼ一致。(橋本で
は、他の格助詞の上に来るものを「準体助詞」
としている。)

② 体言につくことで一致

③ 他の格助詞と重なって用いられるのを、
どう見るか

④ 「動詞+て」につく場合の「から」に対
する見方

⑤ 連体用法に対する見方

⑥ 「から」の用法について、バラバラに並
べてあるが、その基本的なものは何か

以上の諸点では、①は、「から」が文中にお
ける語と語との論理的関係を表わすことから、
当然の結論といえよう。また、②も、当然認め
なければならない。そして、③は、「そんなこ
とはない」と否定する説と、認める説とがある
が、実例を無視しない限り、認めなければなら
ぬであろう。これには、その重なり方とそれに

対する見方の問題がある。なお、④以下も、各説で相違している。

細かいことは別にして、これから究明すべき問題点として、つぎのように整理できるであろう。

- ① 格助詞の範囲の設定；
- ② 格助詞の重なりの問題；
- ③ 「動詞＋て」の扱い；
- ④ 「から」の連体用法について；
- ⑤ 「から」の本質的用法。

以上の五点を明らかにすれば、従来の説から引き出された問題点ははっきりとし、「から」についてある程度の結論が得られるだろうと考えられる。

Ⅲ 問題点の考察

本節では、前節で整理した問題点を一つ一つ分析し、検討して行きたい。

(一) 格助詞の範囲の設定

今までの文法論では、格助詞の範囲の設定について、まだ定説はない。「従来の説」で見てきたように、「から」の扱いについては、相違が見られる。その相違は、橋本氏の「準体助詞」に見られるもので、ほかの説では一致している。「準体助詞」を立てたのは言うまでもなく、「格助詞同士が重なることは有りえない」という原則に従ったものである。そして、いわゆる格助詞といわれているもの同士が重なった場合、前出のものを「準体助詞」と命名して、その解決をはかろうとしたものである。これは結局、あとで検討する格助詞の重なりの問題とも関連するが、ここでは、まず、「から」は「格」を表わすかどうか、それを「準体助詞」に入れるのは適当かどうか、というところから論をすすめたい。

(1) 格とは何か

格助詞について考察する時、まず、格について見ておく必要がある。

A. 手もとにある辞書類の解釈から見る

a) 格 (case) ①. 文法で、文中における実質概念を表わす語 (名詞、動詞、形容詞、副詞) の間の意味的關係。主格、目的格、修飾格、述格など。②. 屈折語において、名詞、代名詞、形容詞が文中で、他の品詞に対して持つ關係を表わす語形。ラテン語には、主格、呼格、属格、与格、対格、奮格の六つ。ドイツ語には、主格、属格、与格、対格の四つがある。

(新村出「広辞苑」第二版補訂版)

b) 某些言語中名詞 (有的包括代詞、形容詞) 的語法範疇, 用語尾變化來表示宅和別的詞之間的語法關係。例如, 俄語的名詞, 代詞, 形容詞都有之个格。/ある言語の名詞 (代名詞や形容詞が含まれるものもある) の文法的カテゴリーである。語尾變化により、他の語との文法關係を示す。例えば、ロシア語は、名詞、代名詞、形容詞が、ともに、六つの格を持っている。

(「現代漢語詞典」中国社会科学院語言研究所詞典編輯室, 1981. 1)

c) CASE. In inflected languages the form of a noun pronoun or adjective which indicates its relationship to other words in a sentence. / 屈折語において名詞、代名詞及び形容詞が文中において他の語に対する關係を示す形式のことである。

(Longman Modern English Dictionary. Editor Owon Watson)

B. 以上の各辞典の実証として、ロシア語とドイツ語の格をのぞいてみたい。なお、便宜上、それぞれの格に、それにあたる日本語の格助詞をつけてみた。

a) ロシア語

名詞(大学生)単数

第一格 CТy,ꞑe HT = が(主格)

第二格 CТy,ꞑe HTa = の(属格)

第三格 CТy,ꞑe HTy = に(与格)

第四格 CТy,ꞑe HTa = を(対格)

第五格 CТy,ꞑe HTom = で(奪格)

第六格 O CТy,ꞑe HTe (前置詞によるもの)。

(注:複数,陰性,および代名詞の例は略す)

形容詞は,その修飾するものに従って,それと一致する格の語形を採るが,連体修飾語という文法的役割は変わらない(例は略す)。

b) ドイツ語(「大学生」単数)

第一格 der Student = が(主格)

第二格 des Studenten = の(属格)

第三格 dem Studenten = に(与格)

第四格 den Studenten = を(対格)

(注:複数,陰性及び他の品詞の例は略す)

以上の各辞典の解釈及び,その実証として見たロシア語,ドイツ語では,ほぼその解釈が一致している。つまり,格とは,本来,屈折語の文法用語であること,文中で語と語との論理関係を表わすことなどである。したがって,格について,つぎのように定義できると思われる。

格とは,屈折語において,名詞,代名詞などが,文中で他の語に対して持つ論理関係を表わす語形に名づけたものである。

(2) 日本語における格と格助詞の範囲設定

日本語は膠着語であるので,むろん,屈折語のような語形の変化は持たない。膠着語である日本語の格——文中における語と語との論理関係——は,助詞がくっつくことによって示される。したがって,

日本語の格とは,文中において,体言(名詞,

代名詞,数詞)が助詞のマークによって示される他の語との関係を言う。

そして,助詞の中で,語と語との論理関係を示す働きをする助詞類を,格助詞という。この格助詞が,屈折語における語形に相当し,日本語における格の印と見てよいであろう。

このような格と格助詞の定義から,日本語の格助詞は,「が,の,に,を,へ,と,から,より,で」の九つとした方が,ほぼ妥当であろうと思う。これはまた,これまで大体一致して認められ,定説に近いものである。ただし,「まで」については,まだ,多少の疑問を持ち,それを別の機会に調べて見ることにしたい。

これから,橋本氏の「準体助詞」の「から」についてすこし見てみたい。

橋本氏が「準体助詞」を立てたのは,それが他の格助詞と重なるところによるものである。しかし,準体助詞を立てるのは適当なのかどうか,それによって,格助詞の重なるの説明がつかどうか問題である。

まず気がつくのは,準体助詞を立てることによって解決されるのは,格助詞「の」「から」だけである。ところが,格助詞が重なり合うのは,むろん,その二つだけではない。つぎの例を参照されたい。

① 東京へを別にすれば,大阪への人選が問題だ。

② 今となっては,自由をより,独立をだ。

③ 東京での商売は大阪でよりやりやすい。上の例で明らかのように,「の」「から」以外でも格助詞の重なりはあるものであるし,そして,準体助詞を立てることによって解決されたかのように見える「への」「での」などの重なりも,必ずしも納得のできるものではない。というのは,重なり合う二格助詞のうち,どちら

か任意の一方を解釈すればよいわけではなく、上にくるものすべてが解釈されねばならぬからである。したがって、上の例(いずれも作例だが)で見ると限りでは、「へ、を、で」なども当然、問題にされてよいものである。

ところで、格助詞が重なり合うのは、「非論理的」とはいえ、それは格を表わすに間違いなく、それにもかかわらず、格助詞から(その用法だけでも)除外されるのは、適当とは認めがたい。他の格助詞と重なって、上に来る場合について、どう見るべきかは、本稿ではあとで詳しく見るつもりだが、日本語の格助詞の一用法とした方が、よさそうに思われる。

(二) 格助詞の重なりの問題

日本語文法の問題を研究するとき、当然のことながら、すでに形成された他の言語の固定観念にとらわれずに、日本語として研究すべきである。

前で見えてきたように、格はもともと屈折語の用語、概念であったのが、日本語の文法に取り入れられたものである。格にかんするものと考え、観念なども、ともすると、日本語研究のときに、まぎれこんでくる。屈折語においては、格は、名詞、代名詞、形容詞などの語形変化で示されるもので、それが何格であろうと、ほぼ並列の関係にあり、そして、大体日本語よりその数が少ない。しかし、日本語では、付属語の助詞によって格が示され、その格も多いし、そしてまた、必ずしも同列的には扱えないものがある。

露語の格(日本語の相当する格助詞で示す。)

が、の、に、を、で

独語の格：が、の、に、を

ラテン語の格：が、の、に、を、で

これら三ヶ国語の格を比較してみると、その共

通項は、「がのにを」である。この四つが文中における語と語との論理関係を示す上で、最も重要な役割をはたすためであろう。「の」はいろいろと特殊なところがあって、あとで詳しく述べるが、ひとまず、「がにを」を「第1種の格助詞」、「と、へ、より、から、で」などを、「第2種の格助詞」、「の」を「第3種の格助詞」と呼んでおく。

文構成上(文中における語と語との論理関係を示す上で)もっとも重要な役割をはたすことは、文章において、もとになるもの、最も多用されるものとも考えられる。手もとにある童話「わらしべ長者」の中の格助詞数を数えたら、つぎのような結果が出ている。

が49(74)、の110、に65、を98、と22、へ11、から11、より0、で25。(全文で11ページ)。

(注：「が」の()の中の数字は、明らかに他の副、係助詞が代わっているもの)。

「がのにを」が、第2種の格助詞より、ずっと多用されていることが明らかである。

(1) このように、日本語の格助詞を、第1種、第2種と第3種に分けたのは、その意味、機能によるものである。つまり、第1種は、いわゆる純粋な格助詞で、第2種は、副助詞的要素を持ったもので、第3種は、特殊な用法のものである。

これを明らかにするため、まず、副助詞とは何かをのぞいてみたい。

副助詞の命名者は山田孝雄であるが、氏の定義によれば、副助詞は、係助詞が用言の陳述にかかるのに対して、用言の意義にかかる助詞で、英語などでは、副詞に当るものである。特性の一つとして、ある語を受けて、その語句とそれとの結合体を以て、情態の副詞と同じ意義と用

法とに立たせることがあるとされている。橋本進吉は、ほぼこの命名を継承するが、副助詞は連用語に加わって、ある意味を添えるだけで、「私にだけ知らせてきた」のように、たとえ、この辞がなくともその連用関係は変らないものであるとしている。そして、連用語につかず、上の語を受けて、全体として体言と同じ職能を持つものを作る助詞を、別に準体助詞として立てる。教育上、広義に定義するのは、文部省「中等文法」が代表的で、第一類格助詞、第二類接続助詞、第四類終助詞に入らぬものは、すべて、第三種副助詞に一括している。時枝誠記は、四分類を採るが、副助詞の類を、「限定を表わす助詞」と称し、素材に対する話し手の期待・評価・満足などが表現される点で、他の三類と異なる特色を持つとしている。(各学者の説は「国語学辞典」国語学会編によった)。

ほかに、諸説の出入が多く、助詞の中でも錯綜し、その語彙も一定しない。しかし、単純な論理的格関係の上に、具体的なある意味を話し手が加えようとしている表現であるいわゆるある種の「添意作用」を持っていると認める点では、だいたい共通といえよう。(副助詞の詳しいこと、さらに、それと係助詞の関係などについて論ずるのは、ほかの機会にしたい)。

格助詞の中の第1種は、純粋な論理的格関係を表わし、こうした副助詞的な「添意作用」は見られぬが、第2種は、こうした添意作用が見られ、また、副助詞の中の一部の、添意作用の弱いもの(用法)と区別しにくい場合さえある。

① ○日本から来た代表团

cf. 東京まで行く飛行機

○借金は一千万円からある。

cf. あなたまでそう言うのか。

② 私でできることなら、何でもおっしやっ

て下さい。

③ 敵と戦う。

④ 北京へ行く。

上の例の①②では、副助詞と似た添意作用が表われていて、ときには、副助詞の中のあるものと区別できないこともある。第1種の格助詞との違いははっきりしている。そして、②③④で見られるように、日本語の格は、他の言語(屈折語)より多い分だけ、細かくなっており、したがって、あるきまった範囲の動詞と結合する傾向が表われている。その結果として、下の用言を省略しても、格助詞によって大体の意味についての察しがつく。これが第2種の格助詞が準体言になり、その格が下につく他の格助詞によって示される、つまり、格助詞が重なる現象をおこす原因ではないかと思われる。つまり、第2種の格助詞は、格助詞と副助詞の間に位置し、格助詞の重なりにおいて、その副助詞的性格をも表わすといえよう。

格助詞が重なるのは、主に第1種と第2種の間、第2種同士及び第1種、第2種と第3種との重なり(後述)である。そして、第1種と第2種が重なる時は、普通、第2種が体言といっしょに体言に準ずるものになり、第1種がそれについて、その連語の格を示す、つまり、格助詞として機能するのである。第2種同士の重なりは、やはり上に来るものが体言に準ずるものになり、下にくるものがその格関係を示す。これはまた、格助詞と副助詞とが重なる場合と似たような現象である。

なお、第1種の格助詞は、純粋な格関係を表わすので、原則としては互いに重ならないものであるが、たまに見かけるのは、「引用」の意味を示すものに限り、格助詞の重なりとは見ずに、用言の省略による短絡現象と見た方がよか

ろう。

- ⑤ 私とが長年の友人だ。
- ⑥ これからが大変だ。
- ⑦ あすからにします。
- ⑧ 東京へを別にすれば大阪への人選が一番の問題だ。
- ⑨ 青いのと赤いのとにする。
- ⑩ 「国家が独立を、民族が解放を」がわれわれの一貫した主張だ。

(2) 格助詞が重なる場合の「の」の表われ方

「の」は格助詞の中でも特殊なもので、他の格助詞との重なりも、範囲が広いし、位置も上だったり下だったりして、一番複雑な様相を示している。

ところで、「の」が特殊なのは、何も日本語に限ったことではない。英語と中国語の「の」に相当するものにも、同じ特殊なところが見られる。

a) 英語の場合

- ① Use my pen please.
Use mine please.
- ② Use Yamada's pen please.
Use Yamada's please.

b) 中国語の場合

- ① 請用我的筆。
請用我的。

英語の場合は、代名詞では、「私の」と「私の(ペン)」との二つの語があって、属格を示すこと(my)と名詞相当のものとしての働きをすること(mine)の二つの作用を、分かち持っている。名詞の属格の場合は「's」のついた属格と同形のもので、名詞相当のものとして働き、日本語の「の」格と他の格との重なりと同じ現象が表われる。

中国語の場合、特に「格」という概念はなく、

属格を示す時は「的」という語をつけて示す。他の「格」のようなもの(文中での語の文法的役割)はすべて、語順によって示される。したがって、「請用我的筆」は「私のペンを使え」で、問題のない構文であるが、「請用我的」は「私の使え」になり、「的」に示される属格相当の意義と語順に示される目的語の意義が重なることになる。

恐らく、格の表現が厳密な言語ほど(屈折語、例えばロシア語など)、その重なりが表われにくく、格の表現がゆるやかな、ひいてはまったくそのしるしのないものほど、その重なりは容易なのではなからうか。ただし筆者の屈折語に関する不勉強ゆえ、これについては多く論じえない。

日本語においては、この種の重なりがしょっちゅうあることはあらためて言うまでもない。これはまた、橋本氏が「の」を準体助詞に入れた一因でもある。

「の」はまた、いろいろな(主に第2種の)格助詞について、その格助詞とそのマークする語からなる連語が所属格であることを示す。この場合は、「の」が格助詞として機能し、その前の格助詞は、前の体言といっしょに、体言に準ずるものになるのである。前出のように、第2種の格助詞の、用言がなくても格助詞だけでその意義が推察できるところから来るものと考えられる。また、第1種の格助詞は、「引用」以外には、この「の」と重なって上に来ることはない。

- 東京への飛行機。
- 敵との戦い。
- 日本語での会話。
- 日本からの代表団。
- 私がの驚きの声

○学生による自治をのプラカード。など。

(3) 格助詞の重なりをどう見るべきか

山田孝雄は、格助詞同士は、重なり合うことは有りえぬと断言し、橋本進吉は、実際にあるその重なりをなくすため「準体助詞」を立てた。ところが、前から見てきたように、「体言の、文中における他の語との論理関係を示す助詞類」を、格助詞とすれば、日本語の格助詞は「が、の、に、を、へ、と、から、より、で」であるし、また、この九つの格助詞の間に重なりはあるのである。しかし、論理学の観点からすれば、これはいかにも不合理で、いかにも非論理的である、ということになりそうである。論理学の法則も、当然ながら逆えないものであるし、また一方、日本語における格助詞の重なりも事実として否定できないのは言うまでもない。そこで、その間のことをどう説明すべきかがわれわれの課題である。

これまで見てきたところを、私見としてまとめると、①. 日本語の格助詞を、純粹に格を示すか、副助詞的要素があるか、特殊なものであるかによって、三種に分ける；②. 屈折語より、格助詞によって示される格の数が多いことから、第2種の格助詞は、おのずからそれぞれのつねに結合する語のグループがきまり、用言がなくてもそれが推察できるようになっている。③. それぞれがそのマークする体言といっしょになって、体言に準ずるものになる可能性が生まれる。④. 日本語では、表現の必要上、その重なりが生じ、その場合、上に来るものが、重なる瞬間に、準体言に変身し、その意味のみが残る。⑤. その場合、下に来る格助詞は、相変わらず格助詞として機能する。⑥. 第1種の格助詞は、純粹な格を表わすゆえ、「引用」以外に、他の格助詞と重なって上に来ることはない。第2種

は、副助詞的要素があるゆえ、他の2種と重なったり、第2種同士で重なったりする。第1種との場合、上にしか来ないが、他の場合は、上にも下にも来る。⑦. 第3種の格助詞は、重なる範囲が最も広く、位置も上だったり、下だったりするが、上にくると、準体言になり、下にくると、格助詞として機能する。⑧. 格助詞のこの種の用法は、あくまでも日本語の格助詞の一用法とすべきで、重なるから非論理的で、格助詞から除外すべきだという考え方は採るべきではない。この場合、格助詞としての機能は、一時的に失なうとはいえ、その本質的な格を表わすという機能は依然として保有されているものと解される。もし、これらを格助詞から排除するとすれば、格助詞としては、第1種しか残らなくなる、ということになる。

(三) 「動＋て」の扱い

「から」は格助詞である以上、体言または体言に準ずるものにつくのは言うまでもない。ところで、「向うへ行ってから」「夜になってから」のように、「動詞＋て＋から」の場合において、その「て」にみちびかれる文飾は準体言かどうか問題になる。「から」を説明する時に、湯沢氏の例文に出ていて、ほかの説には出ていないし、また、それに対する説明は、いずれにもないので、当然、明らかにせねばならぬ問題である。

「て」文飾は普通、準体言と考えられている。湯沢氏もそういうことから「～てから」の例文を、格助詞「から」の用法に入れていると思われるが、その「て」についての従来の説明は、はなはだ不明確に思われるものがある。

(1) まず、手もとにある学者の説から、「て」についての説明を見てみたい。

A. 湯沢 幸吉郎

接続助詞

1. 対等の文節をつくる。

春がすぎて夏が来た。

2. 連用修飾語をつくる。

a) 水が出て、向こうの岸に渡られなかった。
(=から、ので)。

b) あれほど叱られてまだやめない。(=の
に)。

c) 声を張りあげて校歌をうたう。(=下に
述べる動作、作用の行なわれる有様や事情を有
らかにする文節をつくる)。

3. 補助的文節に連なる文節をつくる。

湯がわいている。

夕飯はもう食べてしまった。

(湯沢「口語法精説」による)。

B. 時枝 誠記

接続を表わす助詞

同時に存在する動作及び行為、或いは時間
的に継起する事柄と事柄との関係の認定。

て — 図書館に行ってしらべてみる。

外をのぞいてみる。

「て」は同時的な事柄、継起的な事柄のいつれ
の接続にも用いられる。

(時枝「日本文法・口語篇」による)。

C. 松村 明

1. 事実の並立を表わす。

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭もまが
きも秋の野らなる。

2. 事実の継起

春過ぎ而、夏来たるらし白たへの衣ほした
り天の香具山。

3. 原因・理由

障ることありて、なお同じ所なり。

4. 連用修飾の関係

見渡せば、柳桜をこきませて都ぞ春の錦な

りける。

5. 逆接の関係(例略)

現代語における用法はこれと大体同じである。

(松村「^{古典語}助詞、助動詞詳解」による)。

D. 佐久間

接続助詞

○まだ舟の都合がわるいと見えて、お前さん
の手紙が来ない。

○こちらは、この二、三日、毎日かみなりが
鳴って雨が降る。

○澄んだ水の流れる川や青い木のある山がめ
づらしくっておもしろい。

以上の各説で見ると限りでは、「て」に体言に
準ずる用法があるとは思えないことになる。

(2) 一方、実際の日本語においては、「て」
にみちびかれる文節は、体言に近い用法がある
ようにも思われる。したがって、それがどの程
度のものか、またはそういった体言的性質を持
っているか否かが問題である。

それを実証するには、実例でもってするほう
が一番のぞましいだろうが、急いでまとめる本
稿では、そういう余裕はないので、不十分とは
承知しながら、体言につくはずの格助詞で確め
るという方法を探りたい。

a) 第1種の格助詞

○わらってが泣き顔になってしまった。

○止めてを逆にしてはいけない。

○笑ってにまぎれてしばし、さびしさを忘れ
る。

b) 第2種の格助詞

○その笑ってへ憤りが集中した。

○笑ってと反対の方向へ行く。

○友達と別れてからふさいでいる。

○笑ってより泣いてのほうがびったりだ。

○笑ってでまぎらそうとする。

c) 第3種の格助詞

○この先生あってこの弟子だ。

○天才ではなく、努力をかさねての成功だ。

以上の例(いずれも作例だが)で見ると、「て」文節は、準体用法があるとは思えない。第1種と第2種の格助詞(「から」以外)について、いずれも「引用」を表わすものに限られ、「て」と格助詞の間に意味的連けはないのである。それは、たとえば次のような例と比較すれば分かる。

○笑えが泣き顔になった。

○笑えへ憤りが集中した。

一方、第3種の格助詞「の」は、「て」文節について、意味的な連けもあるが、「の」は副詞や他のいろいろな語につくし(その場合本来体言につくべき「の」が副詞についてとすべきか、副詞の体言的用法とすべきかは、ほかのチャンスにゆずりたい)、また、これ一つだけで、ほかの格助詞のいずれにもつかないのなら、証拠としては、いかにも不十分なように思われる。

結局、「から」がついたものだけが、「て」文節の準体言用法を証明するのに一番都合のいい例になるが、本稿では、むしろ「て」で「から」を証明しようとするのが目的なので、これを証拠として取り上げるわけには行かない。したがって、「て」文節と格助詞との結合関係を見て、「て」文節に準体言用法がないとは断言できないと同じように、また、あるとも断言しづらい。

また、「ついて」「こぞって」「重ねて」「初めて」などは、或いは準体言用法があるかとも思われるが、それらは、すでに一語のようになっていて、「て」文節の一般的用法とは考えられない。

(3) 「て」につく「から」の役割

「動詞+て」に「から」がついて、「その後」の意を表わす。一方、「から」がなくても、「て」は事柄の時間的継起、つまり、「その後」の意があるのは、前出従来の学者の説に明らかである。ということは、その文から「から」をとっても、文の意味はさして変わらないということになる。これは、文の基本的論理構造をささえる格助詞の用法としては、いかにも不合理で、有りえないことのように思える。

以上の3点を以て、「て」にみちびかれる文節に、体言に準ずる働きはない、少なくとも、格助詞のマークを受けるほどの準体言用法はないように思われる。したがって、「て」につく「から」も、格助詞ではなく、接続助詞の用法とすべきである。

ところで、「て」文節は普通、体言に準ずるものと言われ、またそれはそれだけの根拠もあるはずだとも思われるから、手もとの資料が不十分ゆえ、結論を急がずに、これからの宿題としたい。

(四) 「から」の連体用法について

「から」の用法について、湯沢文法では、つぎのような例を挙げて、「から」に連体用法があるとしている。

○それから先は私も分からない。

○明治から以前には、そんな事はなかった。

○あの川から東が隣の村です。

日本語の格助詞は、「の」以外では普通、体言について用言につづくと考えられているので、湯沢説を採れば、日本語の格助詞について、もっと別な解釈を下さねばならぬことになる。

しかし、これに関しては、早くから時枝氏の説がある。

「きっぱりお言いでしたか。」

「明日から学校だ。」

に於いて、『きっぱり』は常に副詞的修飾語に用いられる語であるから、これを副詞と名づけることは既に述べた。そして、この語は下の『お言い』という用言から転成した体言を修飾する関係に立っている。しかし、『きっぱり』という副詞は、体言という品詞に関係しているのではなく、この語の持つ動作的意味に関係しているのである。また、次の『明日』は、助詞『から』によって格が表示され、連用修飾語に立っている体言であるから、一般には、用言との関係が予想されるのであるが、ここでは、体言『学校』が関係している。これも実は、体言そのものが関係しているのではなく、『学校』という語の持つ動作的意味に関係するのである。『学校』は、ここでは、建築物の意味でなく、学習、勉強と同義語に用いられ、動作・状態を意味するのである。従って『明日』という語も、連用修飾語というよりは、副詞的修飾語と呼ぶのが適切である。

「わずか三人で仕上げた。」

すこし右へよれ。

ずっと昔の話。」

上の例は甚だ難問であって、確実な説明は下しにくい。『わずか三人』の場合は、『三人』が量的な状態を表わしたものと考えられる。『すこし右』の場合の『右』は、単なる方向でなくして、そこには、動作の概念が含まれているものと見られる。『ずっと昔』の場合の『昔』も同様に、時間を遡って行くという思考上の動作があるように見られる。従って、過去の年代が決定されている場合、例えば『ずっと寛永時代』などとは云われない。『はるか頂上には雲がただよっている』というような場合にも、『頂上』という語に、視覚的な動作が伴うが故に云われ

るであろうと思う。(以上「日本文法・口語篇」)

時枝氏の説は、一口にまとめて言えば、修飾される語には、何らかの動作、状態を示す意があって、その動作性・状態性が修飾される、ということである。

これについてももうすこし詳しく見てみたい。まず、つぎの例を見て、この類の語にどんなものがあるかを見たい。

- この川から向うは千葉県です。
- その遺跡は、あの村から南の方にある。
- あの川から東が隣の村です。
- 道から南がわが問題のところだ。
- 先祖代々から伝授の家宝。
- 桃山時代から伝世の茶わん。

以上の例文から、このような修飾を受けるものは大体、二つの場合に分けられることが分かる。一つは「東、西、南、北、向う、前、後」のような空間的、時間的方角を示すものである。これまでに、特に決まったような名称はないようだが、時間を示すものも含めてさしずめ、「方位詞」と呼んでおく。もう一つは、「伝授」「開始」のような、「する」をつけると、動詞になるような、動作性を持った名詞である。

方位詞については、動作性というよりも副詞性とも言うべきものであって、この場合に限らず、この類の語は、名詞として主語、目的語などをなす一方、副詞と同じように用いられることも、かなり普通である。それはつぎの事実で証明されるであろう。

a) すべてではないが、助詞をつけずに副詞と同じように用いられることがある。

- 明日行こう。
- 以前(は)そんなことはなかった。

b) 「動詞+て」の修飾をうける。

- 向って右がその店です。

○まがって左にあります。

c) 程度を表わす副詞の修飾をうける。

○すぐ前 ○だいぶ後

○ちょっと上 ○かなり向う

○すこし手前, など。

その副詞性のため、これらの語は他の助詞などの助けを借りずに、それ自身、連用修飾（副詞的修飾）をうけることができる。

ところで、動作性を持った名詞の場合は、ちょっと違うようである。それは、その語に、「だ」や「の」などをつけていないと、このような連用修飾は受けえないのである。（前出例文参照）

これもその「動作性」が連用修飾をうけるには違いないが、「だ」か「の」を介さないと、すわりの悪い文になってしまう。これにかんしては、「だ」を用言の代用とし、「の」をその連体形とする見方（奥津敬一郎）もあるが、それに従うと、この問題は完全に解明される形にはなるが、ほかの関連問題もあることだし、一応、奥津説を紹介し、結論は、これからの研究に期待したい。

奥津氏によると、

その代表団は日本から来た ⇨

その代表団は日本からだ。

日本から来た代表団 ⇨

日本からだ+代表団 ⇨

日本からの代表団。

（奥津「『ボクハウナギダ』の文法」による）。

この説を適用して、例文を分析すれば、

先祖代々から伝授された家宝 ⇨

先祖代々から伝授だ+家宝 ⇨

先祖代々から伝授の家宝。

この奥津説を適用するのには、「伝授の家宝」の「の」がいきなり、「される」になったりして、やや突飛に感じないでもないし、また、そ

れに従わなければ、この種の語には、なぜ方位詞と違って、「だ」か「の」を介さないと成り立たないかの問題はうやむやになってしまう。それに、時枝氏が「右」にも「動詞の概念」があるとするのも、いささか苦しいようにも思われる。やはり、これからの課題として残したい。

これで分かるように、「から」がこれらの語を修飾するからといって、「から」に連体用法があるとするのは適当とは考えにくい。むしろ、これらの語の副助性、動詞性を修飾するものとし、つまり、体言の中で、この種の語を特殊なグループとすべきであろう。

Ⅳ. 「から」を用いた実例

従来の説とその問題点を見てきたところで、日本語の実例を見てみたい。例は童話「わらしべ長者」と「ツルの恩がえし」から採り、さらに、辞書類でおぎなった。

○朝から晩まで、朝から晩まで、何日も一生けんめいに観音さまを拝んで、どうかお助けください、どうかお助けくださいとお願いしました。

○観音さまが御堂の奥の方から出ておいでになって、「これ、これ」といわれました。

○ちょうどそこへ、京都のほうからきれいな牛車に乗って、たくさんの家来をつれて長谷へおまいりする人がやってきました。

○これはさきほど観音さまから、いただいたばかりのわらしべなのです。

○これはじつは、今京都の奥さまからいただいたばかりのミカンです。

○おまえたちは、馬のしまつをして、あとから追いついてくるがよい。

○なにぶん、遠いところから来た人たちで、ことばもよくつうぜず……。

○それでまず、馬を村からはなれた林のかけ

に引いて行って、木につないで休ませました。

○それでじゅうぶん、したくをして、その馬に乗って、いよいよ村のかけから出てきました。

○おじいさんの頭の上を三べんまわってそれから、山のほうへたって行きました。

○あったこともない人なもんで、これからたずねるといっても、何かえんりよで行きかねるといっているのであります。

○町から糸を買ってきてください。

○晩になると、その織り場から出てきました。

○機をほどく音がしたかと思うと、娘がびよぶの中から出てきて……。

○そうして、えんがわからバタバタッと羽ばたきをして、見るまに、空にまいあがり……。

○山から雲が涌く。

○天から授かる。

○昨日から寝ていない。

○先の定理から証明される。

○お寒さの折から御自愛下さい。

○日本酒は米から造る。

○窓から光がさす。

○お前から伝える。

○東海道をそれ、宇治から京都に入る。

○的からそれる。

○角から数えて三軒目。

○百円から百五十円ほどの品。

○千人からの人が出た。

○私の着物から湯気が立って、頭が痛むほど火が強かった。

○駅長さんからよく教えてやって頂いて……。

○まあ、お隣からお祝を下すったわ。

○やっと家庭の雑事から解放された。

○なるべく大ぜいの中から候補者を選ぶべきだ。

○お前の学校の月謝は、兄さんがしががない給

仕の月給から払ってやったのを忘れたのか。

○彼は、すぐに課長から部長に昇進した。

○水は水素と酸素とからなっている。

○実に些細なことから、私は今の家を、住み憂く思うようになったのであるが。

○その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。

○女の立場から言えば、そんな男は許せない。

○病後の養生のために田舎の家へ帰ってもう三月からになる。

○一体、後足で砂をかけた社へ、元気で舞い戻った料簡からして、私には分からない。

○この年少記者は、或る人々から英雄の一人とさえして崇拜された。

以上の例文は、いずれも先の問題点分析のところで分析したものと一致し、ほかにとくに問題点はないものと考えられる。これらの例文をふまえて、格助詞「から」の意味、用法を、まとめていきたい。

三

この章で、従来の説や前の分析、及び実例をふまえて、格助詞「から」の意味、用法をまとめ、それと関係のある他の格助詞との異同などについて見て行きたい。この章では、特に森田良行氏の「基礎日本語」「基礎日本語2」と「日本語の発想」などを参照した。

1. 格助詞「から」の意味・用法

格助詞「から」は、体言または体言に準ずる語につき、動作・行為・作用・状態などの起点を示す。また、それがついたものとともに、体言に準ずるものとなり、他の格助詞のマークによって、文の成分となることがある。

ところで、一口に「起点」といっても、言葉というものは、「日本から来た」のような単純な

文ばかりではない。言いかえれば、具体的な空間的、時間的場所はすぐ「起点」だと分かるが人間を表わす語だったり、抽象名詞だったり、或いはその「から」が前後の文脈から他の意味に見えたりすると、「から」にはいくつもの意義があるように思われがちである。本稿では、そうした一般的な考え方（辞書類にも表われているが）も考慮に入れて、先の定義に従って、つぎのように分けたいと思う。

格助詞「から」, 「起点」を示す	{	具体的時、空の起点を表わすもの（一目で「起点」と分かるもの）。	{	△ 経由点,
		人間だったり、抽象名詞だったりして、他の意義に見える場合		△ 材料, 構成要素,
				△ 原因の由来など。

その下に、さらに細かく分類することもできるが、むしろこの程度の方が「から」の全容を把握するのに一番適当と思うので、この程度にしておく。そして、全体として四つの用法に分けてはいるが、これから明らかにしていくように、それらすべてが、「起点」でつながっていて、いずれも「起点」の一用法かその派生的用法にすぎない。

(一) 空間・時間を示す名詞につき、空間的・時間的起点を示す。さらに、人間を示す名詞につき、対人関係における行為の起点を示す。

(1) 時間を示す名詞につく場合

- 三時から会議がある。
- きのうから降りつづく雪。
- この四月から当社に勤務することになった。
- 十時から開始です。
- 若いころから存じ上げております。
- 前から買ったかったもの。

○ 朝から暑い。

この用法の場合、時間を示す名詞には、時間の一点を示すものと、ある幅を持った時間の両方があり、下につづく語は、継続を表わす動詞とは限らず、普通の動詞、形容(動)詞、「名詞＋だ」などの場合がある。

(2) 場所を表わす名詞の場合

- 東京から来たお客さん。
- 長春から出る列車。
- 裏から見た高尾山。
- ベッドから身を起す。
- 道は二丁目から下り坂になる。
- この川から南は川崎市だ。
- この道から左が、われわれの管轄だ。

この用法も同じ、場所の一点とやや範囲の広い場所があり、下につづくのは、移動性または非移動性の動詞、さらに、方位詞、動作性の名詞などがある。

(3) 人間を表わす名詞につく場合

A. 単数行為、または複数を単数（一つの集団など）とする場合、対人関係における行為の起点（何かをうけとったり、授かったりする相手となる人間）を示す。

- 父から聞いた話。
- 先生からおそわる。
- 山田さんからかかってきた電話。
- 私からも一つよろしくお願いします。
- 自分から言うのも何だけど……。
- 奴からすれば、ここで折れるわけにはいかないだろう。

この場合で言う単数行為とは、その動作が単数の人間によって行なわれるものを言う。

B. 複数関係における何かの行為の起点

- みんなそううわさしているが、最初は奴から言い出したことだ。

○だれからともなく言い出した。

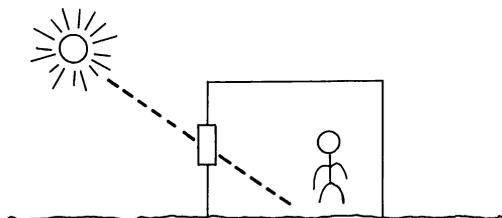
(二). 到達点側から見て、その動作、作用が直接起点から作用がおよばず、いったん他所を経由して間接に作用が及ぶ場合に、その経由点を示す。

(1) 場所を表わす名詞につく場合

- ① 窓から朝日がさしこむ。
- ② 窓からゴミを捨てる。
- ③ 玄関からお入り下さい。
- ④ 列車の窓から手をさし出す。
- ⑤ 百円玉を穴から入れる。
- ⑥ 三つ目の信号から右へまがる。
- ⑦ 坂へさしかかる所から左折してしばらく行くと……。

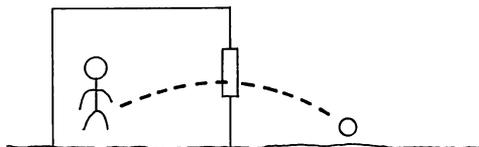
この用法の場合、表面的には、通ってくる所(経由点)であっても、その発話の意識の発想ではどこを直接の起点にするかの問題である。すなわち、あくまでも、到達点の側から見たものであり、到達点から求めた(直接の)起点である。

例えば、例①は、つぎの絵で示されるように部屋の中で、窓を直接の起点と見て始めてこの文が成立するのである。



そして、②の例では、「ゴミをそとに出す」が話の前提で、部屋の中のどこかから外のどこかまでゴミを移す目的を、どんなコースを通して実現するかが問題である。外のごみ捨て場(またはゴミが捨てられる所)から見て、戸口が直接の起点になるか、窓がそれになるかの問題で

ある。その意識のもとでこそ、部屋の中での発話であっても、「から」が用いられると考えられる。



つぎのような例もある。

○北海道を出て、東京をまわって大阪から帰ってきた。

○世界各地をてんでんとかけまわって、パリから帰国した。

なお、⑥⑦の例は、この用法の一変形とみなすべきかと思われる。このような例においては、その場所を境にして状態の変化が起ることを示し、「から」はその状態の変化の起点を示す。

(2) 人間を表わす語につく場合

A. 単数行為(複数を単数とする)の場合、行為の代表者を示す。

○その件について私から皆さんにご説明申し上げます。

○社長に代わりまして、部長の私からごあいさつ申し上げます。



B. 複数関係における行為の順序

○じゃ、私から始めましょう。

○きみから始めたまえ。

○順番にいくことにして、まず山田さんからよんでもらいます。

この用法において、時間を表わす名詞の場合

も、理論的には同じであるはずだが、一般的には、それを経由点とは考えないようである。

cf. ○おふろのあと、10時までテレビを見てお茶を飲んで、10時半から勉強し出した。

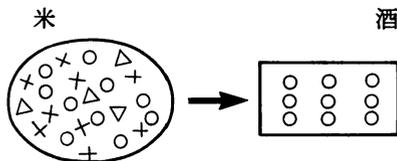
○北海道を出て、東京で遊んで、大阪から帰ってきた。

(三) 材料、構成要素を表わす

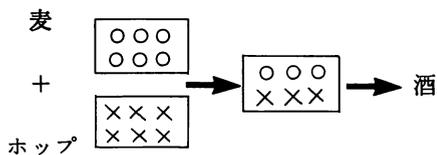
○日本酒は、米から造る。

○水は水素と酸素とからなっている。

これらの例は、「材料、構成要素を表わす」とされている。ところが、実際的には、「米」を「酒」の存在する場所と見る意識があり、その「酒」の「材料」であるところの「米」を、場所的にとらえて始めてこの表現は成立つのである。つまり、そこから「取り出す」という発想である。ほかに、「ナイロンは石油から出来る」「絹糸は繭から採る」などもこの「抽出」意識によるものである。



場所的にその材料となるものをとらえてその「抽出」を表わすことから、さらに、そこにあるものを組み合わせて、新しい物をこしらえ出す意識に発展する。「ビールは麦とホップから造る」などがそれである。



「麦」と「ホップ」は「ビール」の材料の存在場所として、また、ビールを生み出す源としてとらえられている。その組み合わせ、混合意

識が強まると、「学校は、学生と教職員からなる」のように、組織・組成の表現となる。その「抽出意識」と「源泉意識」こそ、「から」の「材料・構成要素」を示す用法のポイントである。

いずれにしても、起点の意味が発想の底にあるのは明らかである。「材料・構成要素」とされたのは、一部の用法が「経由点」とされたのと同じように、前後の語からなるその文の論理的意味による命名であろう。

(四) 原因の由来、判断のもとなどを示す

もともと、動作・行為・作用の起点であるがそれを問題の発生源、すなわち、原因の由来する所、または、判断のより所、その手掛かりなどとしてとらえ、取り上げたものである。

ほとんどが抽象名詞である。つまり、抽象名詞に「から」がついたものを、一項目として立てたもので、起点を表わす意味に変わりはない。ところが、「起点」であっても、抽象名詞だから、表面的には、「原因の由来」「判断のもと」などに見えるのである。なお、「原因の由来」「判断のもと」などは、前後の語からなるその文の論理的意味による命名である。

○かぜから肺炎をひきおこした。

○運転手の不注意から大惨事になる。

○彼の日頃の言動から考えればそれは有りうることだ。

○お寒さの折から、ご自愛下さい。

○面構えから(して)不敵だ。

○実に些細なことから、私は今の家を住み憂く思うようになったのであるが。

○その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。

○彼の自白から判断すると、これは故意の殺人事件ではなくて、正当防衛によるものと考え

られる。

この場合は、もともとは場所の起点で、その用法がさらに拡大されたものである。抽象名詞だから、「場所の起点」のイメージが明瞭でなくなるが、起点であることに変わらない。

○運転手の不注意から大惨事になる

運転手の不注意 ⇨ 大惨事になること

これは、「運転手の不注意」というところから来る「大惨事になる」の状態という意であり、「運転手の不注意」は、場所的にとらえられ、その場所的起点の意から、「から」が用いられたものと考えられる。一方、この文の論理的意味を見ると、「運転手の不注意」と「大惨事になる」とは、因果関係にあり、「大惨事」は「運転手の不注意」に起因し、由来しているので、「原因の由来」と言われるのである。

抽象名詞の場合は、このようなケースが多い。

従来の説と辞書類の解釈なども考慮に入れて、以上の四つに分けたが、それぞれの部分でも言ったように、そのいずれもが、起点を表わすものであり、そこに、この四つの用法の間のつながりがある。

Ⅱ 格助詞「から」と、それと関連のある他の格助詞との異同

前節で、「から」の意味、用法を見てきたが、この「から」が実際の文において、他の格助詞と非常に近い用法を持つことがある。それは近いようで、全然違うものだったり、かなり近いので、たいていの場合、置きかえられるものだったり、場合によって置きかえられたり、そうでなかったりする。その一部について、ただしてみたい。

(一) 「から」と起点・経由点の「を」

○車を / から降りる。

○部屋を / からとび出す。

○門を / から出る。

○階段を / からころげ落ちる。

○はしごを / から降りる。

○山を / から降りる。

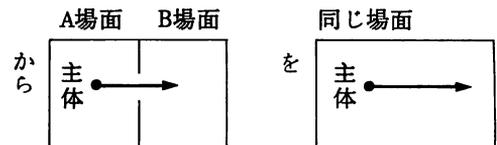
以上の例では、いずれも両方とも可能な文脈である。両方とも可能な文脈とどちらか一方しか採らないもの、そして両方可な場合、その違いなどについてみてみたい。

(1) 起点を表わす場合、「を」は離脱点を表わし、「から」は「出発点」を表わす。したがって、同じ離れて行く場所を表わすが、「を」の方は、その場所に重きを置き、「から」は特に目的地や出発の手段などに重きを置く。とくに、どちらかを強調しないときは、両方とも可能で、互いに置きかえられるが、特に出発の意を強調したり、または、それと到達点を関連づけていう場合は、「を」は採らない。

○成田からアメリカへとび発つ。

また、「途中から引き返す」「上空から降りる」「南から戻る」「沖から帰る」「外国から来た」のように、そこと対立する(到達点としての)他の場所(家、地上、北、岸、日本)を念頭におく移動々作の場合、「から」が用いられ、「を」は用いられない。

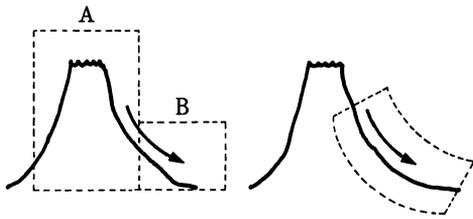
(2) 経由点を表わす場合、「から」は、ある場面(範囲)から、他の場面への移動であり、「を」は同じ場面内の移動である。



例えば、「階段から降りる」は、「どこから降りようか——あの階段から降りよう」というように、「から」を用いれば、別の場面へ移動するための経由点を表わす——結局、ある場面か

ら他の場面移動する起点の意識が潜んでいるが—「を」を用いれば、移動々作の継続する一定場面（経過場所）を表わすことになる。

「山から／を降りる」も同じで、絵で示すと、つぎようになる。



山から降りる 山を降りる

したがって、はっきりした境界線のある二場面間の移動の場合は、「を」は用いられない。

○犯人は窓から逃げた。

○火の手が階段にまで上がっているの、窓から降りよう。

そして、同じ場面での移動は、「から」は用いられない。

○車はゆっくり坂を下っている。

また、「玄関を／から入る」「非常口を／から出る」などは、発話時の意識（発想）により、どっちも用いられることがあるが、それがはっきりと二場面間の移動となると、「を」は採らない。

○泥棒が玄関から入った。

○火事ときは、非常口から出て下さい。

(3) 「出発点」を表わし、そして、人間主体の場合、「を」は目的意識を持ち、意志的な動作が原則であるが、「から」はそれに限らない。

○はしごから／*を落ちた。

(二) 「から」と「に」

1. 対人関係における授受動作の対象を表わ

す場合

○おやじに／からおみやげをもらう。

○山田君に／から聞いた話。

○先生に／からおそわる。

○友達に／から本を借りる。

上の例では、「に」と「から」は置きかえられる。

ところが、同じ文で、置きかえ可能で、しかもほぼ同じような意味を表わしていても「に」はその動作の密着する対象を表わし、「から」はその動作・行為の起点を表わすという発想の違いがある。

(1) 平叙文においては、置きかえ可能だが、とくに「対象」を強調する命令文などにおいては、「に」しか採らないようである。

○私は手もとに持っていないから、山田君に／*からもらって下さい。

○僕の口から言うのは何だから、本人に／*からきいてごらん。

(2) 平叙文においては、つぎのような説がある。

○そのお金、だれからもらったの。

叔母さんに／からもらった。

「に」格を使えば、叔母さんの発意で、一方的によこしたという気持が強く、「から」格を用いると、「……にもらった」同様、叔母さんの発意とも、私の発意で、叔母さんにせがんで、叔母さんから金をせしめたとも解せる。(森田良行「基礎日本語」による)。

(3) 団体・組織あるいは無生物がその授受動作・行為の起点となる場合、普通、対象とはとらないから、「に」を用いないのが普通のものである。

○学校から賞品をもらう。

○区立図書館から借りた本。

○ラジオから聞いたニュース。

○ペンクラブから招待を受けた。

2. 受身動作の出所を表わす場合

○先生に / からほめられる。

○子供は母親に / から言葉を教えられる。

受身動作は、いわゆる「迷惑の受身」をのぞいて、対人関係における授受動作の一種だと思われる。それにおける動作・行為の出所は、「に」と「から」の両方が見られる。「から」は行為の起点を表わし、「に」はその対象を表わすというところに、その違いが求められると思われる。

(1) いわゆる迷惑の受身の文では、普通「に」しか採らない。それは、その動作・行為が、直接主動者から受動者に及ばないからである。主動者が何かをして、その行為自身が受動者に無関係だが、結果として、迷惑が受動者に及ぶのである。したがって、主動者対受動者の関係では、主動者は動作・行為の起点にはならないので、「から」は用いられないのである。

○隣りに二階を建てられて、見晴らしが悪くなった。

○赤坊に泣かれて、一晩中、ねむれなかった。「隣りが二階を建てる」ことは、直接「私」に関係がないが、その行為の結果、「私」は迷惑をうけるのである。したがって、「隣りが二階を建てる」という行為においては、「隣り」は「私」に対する「起点」ではないわけである。

無生物が主動者である文は、この迷惑の受身に限られているので、「から」は採られない。

○雨に降られる。

○霜にやられる。

○車にはねられる。

○新幹線の騒音に悩まされる。

(2) 迷惑の受身でない場合、両方採られるが

つぎのような違いがあるようである。

「から」は起点を表わすので、主動者から行為が発せられて、何人かの間過程（伝達）をへて、受動者に及ぶことも可能である。だから、主動者—受動者間の密着度がうすいし、出所（出自）の意識が発想の底にある。

一方、「に」は、対象を表わすので、間過程はありえず、主動者—受動者間の密着度が強い。

○私は友達に / から仕事をたのまれた。

○子供は母親に / からことばを教えられる。

「仕事をたのむ」行為が直接に行なわれる場合に、「に」の方がびったりし、一旦、他人の伝達などをへて行なわれる場合は、むしろ、「から」が用いられる、という傾向があるようである。「から」と「に」の違いは、そういう密着度の違いと考えられる。

(3) 主動者が人間の集団（団体・組織など）である場合、対象よりも、起点の意識が強く、そして「間過程」があるのが、むしろ普通なので、「に」よりも、「から」を使うのが普通のようなのである。

○市から表彰される。

○大学から名誉博士号が贈られる。

○委員会から資格が与えられる。

○世間から、つまはじきされる。

(三) 材料・構成要素を表わす場合の「から」と「で」

○米で / から酒を造る。

○砂糖きびで / から砂糖をつくる。

材料・構成要素を表わす場合、「で」と「から」の両方が見られる。しかし、「から」は、起点の意から、源泉意識を持ち、「で」は使用、利用という意識が発想にあるのである。

「から」は製品の起点を問題とする語だから

変化の原点にまでさかのぼるプロセス意識があるが、「で」は範囲の限定でしかないから、使用する材料を、何かに指定するだけで、変化のプロセス意識は持たない。

したがって、そのプロセス意識（抽出意識など）が強い場合には、「で」は用いられない。

○カビから新薬を生み出す。

○絹糸は繭から採る。

しかし、「造る」などの語は、ニュアンスの違いがあっても、ほとんど「で」と置きかえられるようである。それに、「加工のプロセスをへていない原材料」から、「使用する原材料」へという発想の転換が可能だからと考えられる。

一方、「使用・利用」の意識の強いものには「から」は用いられない。

○ちっちゃな工場だよ。あきかんをのばしたブリキで、おもちゃをつくってるんだ。

○天ぶら油で揚げる。

Ⅲ これからの課題

本稿では、格助詞「から」に関する従来の説から、その問題点・その意味用法・他の格助詞との異同について一応見てきた。中では、特につぎのような問題は、本稿では甚だ不十分で、なおこれからの研究を要するものである。

(1) 格助詞については、ほかの格助詞も一つ一つ「から」のように分析し、日本語の格助詞の全容、それと他の言語との違い、それ自身の特徴などをしっかり把握する。

(2) その上に、ほかの助詞についても、全面的に分析し、特にそれぞれの種類の助詞の特徴やその語数範囲の設定などを十分に検討する必要がある。それから、それらの各種類の助詞と格助詞との関係をさらに見つめる。

以上の二点が出来たら、日本語の文法について、かなり明確になって来るであろう。

1981. 12

(中国吉林大学教官)